

【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

「盡頭」「盡處」考―如何にして明治・大正期の小説に用いられるようになったのか―

大阪大学大学院文学研究科 修士課程2年 富田 美乃里

はじめに

- 一、「盡頭」「盡處」と「はずれ」について
- 二、近代における「盡頭」「盡處」
 - 二―一、「盡頭」「盡處」の使用例
 - 二―二、明治・大正期に見られる「盡頭」「盡處」の性質
- 三、中国における「盡頭」「盡處」
 - 三―一、「盡頭」「盡處」の使用例（詩・学問書類）
 - 三―二、「盡頭」「盡處」の使用例（白話小説）
- 四、和語「ハヅレ」と漢語「盡頭」「盡處」の接触
 - 四―一、唐話学関連書に見られる「盡頭」
 - 四―二、読本に見られる「盡頭」「盡處」
- 五、明治・大正期の小説と白話語彙
 - 五―一、幸田露伴と白話小説
 - 五―二、森鷗外と白話小説
- 六、総括
- 七、今後の課題

はじめに

明治・大正期の小説類では、しばしば現代では馴染みのない表記を見ることがある。明治・大正期は、日本語が大きな変化を迎えた時代である。特に書き言葉は、従来の漢学の知識に加え、急速に流れ込んできた西欧諸国の概念の融合により、多くの新漢語や和製漢語が生み出された時期で、新しい語や表記と古くからの語や表記が共存していた。この大変化の時代から現代に至るまでの間に、新たに生み出された言葉や表記もあれば、消えてしまった可能性のある言葉や表記も多くある。今回は、「消えてしまった表記」というものに注意して、明治・大正期に使われた語彙を調べた。その中でも特に、当時使われていた語のうち、「読み」は別の表記で残っているにも関わらず、表記だけが消えてしまったケースに着目した。ある特定の時期に用いられ、その後消えてしまった語というのは、元々どのようにして表記として定着し、使用されるに至ったのか。本稿はそういった疑問から出発した。

一、「盡頭」「盡處」と「はずれ」について

本稿では、山田俊雄氏の『ことば散策』（岩波新書 一九九九年）で取り上げられて

いる「盡頭」「盡處」という表記について、語義の変遷と共にその歴史を辿ることとした。『ことば散策』の中で、この表記には、「空間」「場所」を表す「はずれ」という読みが当てられていたことが指摘されており、和語の「はずれ」を当てて熟字訓という形で用いられていたことが分かる。

尚、読みに当てられている和語の「はずれ」という語自体は日本に古くから根付いていた表現で、様々な資料に見ることができるとは。左に一部例を挙げておく。

『狭衣物語』¹ 一〇六九—七七年

1 御几帳のはづれ、けざやかに見えさせ給へる御髪のかかり

『史記抄 十四』一三六八—七九年

2 身ノ重モノハ堂ノハツレニハイヌ事ゾ。自然堂カラアイマチニ落タリナンドカセウ
ブラウヂヤホドニゾ

また、このような用例から、「はずれ」という語については、平仮名・片仮名の「はずれはつれ」「ハツレ（ハツレ）」、漢字の「外れ」「端れ」が散見され、表記の揺れが大きい語である可能性が窺える。

次に、今回問題とした「盡頭」「盡處」という表記自体はいつ頃からあったのかについてであるが、今回調べた限りで、古いものとして次の例が見つかった。尚、「盡處」の用例は見つけられなかった。

『空華日用工夫略集』一三八一年 二月二十六日 義堂周信²

3 君即問湯治何日、余答、今月**盡頭**必定矣

『大学垂加先生講義』一六七九年 山崎闇齋³

4 至善と云へば只善とばかりのことに非ず、**至極盡頭**の善也

用例3、4から、今回問題とした「盡頭」という表記は、明治・大正期以前、中世の頃にも使用されていた表記であることが窺える。ただし「読み」については、3、4の文体から考えて、これらの例は「ハツレ」とは読まれていたとは考えにくい。

語義という面では、用例4に見られる「今月盡頭」は、「今月の終わりまでは」という意味であり、「盡頭」を「時間の範囲」を表すのに使用されていること、そして次の用例4における「盡頭」の意味は、「至極盡頭」、つまり「究極の更に極点である」という意味であり、「盡頭」「盡處」が必ずしも明治・大正期の用例と同様の「空間」「場所」の意味を表していたという訳ではなかったことが窺える。

ではこの「盡頭」「盡處」という表記と、「はずれ」という読みは、いつごろ、どのようにして結び付いたのか。また、「盡頭」「盡處」はいつから「空間」「場所」を示す表記として用いられるようになったのであろうか。

本稿では、「盡頭」「盡處」のうち、より表記と意味の結びつきが分かりづらい「盡頭」

を中心に、語義に注意しながらその表記の歴史を辿っていくこととする。

二、近代における「盡頭」「盡處」

山田（一九九九）で紹介されていた、「場所」を意味する「盡頭」「盡處」が用いられている近代の例を二一に挙げる。用例検索にはインターネット上のデータベース『青空文庫』に、『日本語用例検索』を使用して行った。

用例検索と並行して、「盡頭（尺頭）」「盡處（尺処）」が当時のどの程度一般的な表記であったかの確認を取る為、「盡頭」「盡處」以外の表記で、現在でもよく見られる平仮名表記の「はづれ（はづれ）」と漢字表記の「外れ」、更に「端れ」の検索を行い、用例数の比較・検討を行った。尚、「外れ」「はづれ」については、検索を行った場合、場所を表す以外の意で用いられているもの（「的外れ」等）の検出が非常に多かった為、「場所」に限定できるように「外れ」「はづれ」との共起率の高い「町」「村」をそれぞれに付けた。結果は、「町外れ」が三十一例・「村外れ」が二十六例、計五十七例と、「町はづれ」が三十例・「村はづれ」が十二例の計四十二例。そして、「端れ」が八十三例であった。一方で「盡頭」が十四例、「盡處」は二例のみであった。この結果から、場所をあらわす「はづれ」を表す表記として、「盡頭」「盡處」は決して一般的ではなかったということが窺えた。

二一、「盡頭」「盡處」の使用例

「盡頭」については右で述べたように検索システムで十四の用例が見つかったが、「盡處」については二例しか見つからなかった。そこで、検索で見つかった十四例に加え山田（一九九五）を参考に、鷗外の著書から探し出して補った。

「盡頭」「盡處」の用例は、左から年代順に記載し、初出の資料を手に入れられたものについてはその影印を載せる。尚、用例文中の太文字は引用者が改めたものである。年代は全て発表年代とする。

【盡頭の例】

『金色夜叉』一八九七年 尾崎紅葉

5 行き行きて車はこの小路の盡頭を北に折れ、やや広き街に出でしを

『重右衛門の最後』一九〇二年 田山花袋

6 その頃、村の盡頭に老婆と一緒に駄菓子の見世を出して、子供等を相手に、亀の子焼などを商つて、辛うじて其日の生活を立てて行く女があった。

『雁坂越』一九〇三年 幸田露伴

7 猶村の盡頭まで連れ立って来たお浪に別れて我が村へと飛ぶが如くに走り歸った。

『平凡』一九〇七年 二葉亭四迷

8 縁側の盡頭の雪江さんの部屋で、雪江さんの聲で、

『燈明之巻』一九三三年 泉鏡花

9 こっちの町盡頭の、茶店……酒場か。……ざっとまあ、鯺鈍屋だ。

【盡處の例】

『幽霊塔』第四十六回 奇と云えば 一八九九年 黒岩涙香

10 余「ハイ彼の村の盡処に昨年から住んで居ます」

『読売新聞』「女歌舞伎操の一舞」一八八九年十一月五日掲載 鷗外漁史⁷ 三木竹二
同稿

11 しかも多氣の御城下盡處に

「まぐりも多氣の御城下盡處に（珍齋これにて愕りせ
任打にて）珍「おあずかりとらしてはら委しく御存じ

『調高矣洋絃一曲』⁸ 一九〇五年 森鷗外

12 上手カトリック宗村界の心にて、黒塗の剥けたる十字架を立て、これに下手に製へたる血付きの耶穌の人形を掛け、都べてザラメア村盡處の體。

12* 引返し ザラメア村はづれの場 クレスボオ宅前の場 エストレマヅラ 山の場

『玉を懐いて罪あり』一九〇五年 森鷗外

13 別に仕方もないこと故、町盡處のサン、マルテンといふ處迄往つて、

別に仕方もないこと故、町盡處のサン、マルテンといふ處迄往つて、

山田（一九九五）でも触れられているが、鷗外の用例（12から13）については、ルビが振られていない。従って、唯一ルビが確認できた『読売新聞』掲載の用例11、また、12*に見られる「ザラメア村盡處」と「ザラメア村はづれ」の対応関係に従って、「ハヅレ」と読まれていたと類推することとする。

二二、明治・大正期に見られる「盡頭」「盡處」の性質

『青空文庫』の収録されている作品のうち、「盡頭」「盡處」の表記は一八八〇年代後半から一九三〇年代に発表された作品までの間に用例が確認できた。その後の年代の用例については見つかっておらず、昭和前期（一九二六～四五年）までの間に、元々使用度の少なかったこれらの表記が消えていった可能性が高いことが窺える。

また、『青空文庫』以外のデータベース、『読売新聞』の『明治・大正の読売新聞CD-ROM』でも「盡頭」「盡處」の検索を行ったが、鷗外と竹二が掲載した小説（用

例11) 以外の使用例は見られなかった。唯一見つかった用例11は、『読売新聞』に掲載された例である。当時の『読売新聞』は小新聞(所謂大衆向けのタブロイド紙)であったため、鷗外の作品についても総ルビがほどこされている。

語義については、70頁の用例3、4に見られた時間を表す意味や、極点を表す意味を持つ例は見当たらず、掲載した用例も含め、発見された「盡頭」「盡處」は全て「場所」を表す意味として使われていた。

三、中国における「盡頭」「盡處」

山田(一九九五)、山田(一九九九)では、明治・大正期に表れた「盡頭」「盡處」という表記が中国由来の所謂「漢語」であることが指摘されている。日本は古代から近代まで、絶え間なく漢語を受け入れ続けてきた。「盡頭」「盡處」もその範疇であるが、いつの時代に、こういった文献を媒体として日本に流入してきたのであろうか。三、では、中国における「盡頭」「盡處」について取り上げることとする。ここではできるだけ古い時代の用例、また多様な文献の用例に目を通し、中国における語義(「盡頭」「盡處」の元来の意味)や、どういった資料に多く使われる語であるか確認した。

用例集めにあたっては、中国建国以来から清代に至るまでの叢書を網羅し、多様な文献を収録している『四庫全書』のデータベースを用いた。まず総検索すると、「盡頭」の例が六百五十四例、「盡處」の例が千九百九十五例発見され、どちらも中国でよく使われていた語であるということが分かる。次項に、見つかった例のうち、時代、文献、語義において参考となる用例を挙げる。

三二一、「盡頭」「盡處」の使用例(詩・学問書類)

【盡頭の例】

- 14 『絶句漫興詩』唐代 杜甫 『朱子語類』卷十四 一二七〇年
15 腸斷春江欲盡頭、杖藜徐步立芳州 便是道理十分盡頭

【性理大全書】一四一五年

- 16 山之極高處平陽晉州蒲坂山之盡頭

【盡處の例】

- 17 『朱子語類』卷十五 一二七〇年 『法書考』一三三二年
18 須窮極事物之理到盡處 筆止遺至盡處

【性理大全書】一四一五年

- 19 受業去後須窮究道理到盡處也

『四庫全書』での検索の結果、「盡頭」「盡處」という語は、右の例のような詩類及び

その注釈書類、そして学問書に多く見られることが窺えた。

用例14の杜甫の詩は、「盡頭」という語が唐代には存在していたことを示している。その他の詩類においても「盡頭」「盡處」という表記は多く見られ、『全唐詩』『御選宋詩』『元詩選』等の詩選集に多くの用例が見つかっている。

用例16、19の『性理大全』というのは、性理学（朱子学と同じ）の学問書である。用例15、17の『朱子語類』も朱子学の学問書で、日本にも鎌倉末期に伝来している。朱子学（儒学）以外の学問書類では、特に仏教関連、禅宗関連の資料（『祖堂集』九五二年）等に多くの用例が見られる。

用例18は書道に関する指導書である。書道、水墨画に関する資料（『畫禪室隨筆』一六世紀）等にも、「盡頭」「盡處」の用例を発見することができた。

次に語義に注目すると、これらの用例における「盡頭」「盡處」は「場所」を表すものだけでなく、「極点」や、「終わり」を意味するものが多いことが分かる。「道理が極まる」、つまり「極点」という意味を表す15、19の例や、「筆を止める場所」として「終わり」を意味している18が、その具体的な例である。これらから、中国で使われていた元々の意味は、「場所」に限定した意ではなく、本稿の一、で挙げた日本の用例3、4のように、「終わり」や「尽きたところ（極点）」という広い意味で用いられていたということが分かる。また、用例4、5については作者が義堂周信、山崎闇斎といった、禅宗、儒学（朱子学）の学僧、学者であることから、中国の学問書を介して「盡頭」「盡處」といった語に触れていた可能性は十分に考えられる。

以上から、「盡頭」「盡處」が日本に流入してきた道筋として、まず初めに漢詩類や儒教や仏教関連の学問書を介した経路が考えられる。

しかし、その経路のみで考えた場合、元は広い意味を持ち、学問書や漢詩類で使用されていた表記が、明治期頃までに、「空間」「場所」を表す限定的な意味となって日本の小説類で用いられていることや、和語である「ハツレ」という読みが当てられた経緯については合理的な説明がしにくい。特に、漢詩や学問書といった性質の漢籍の語彙に「ハツレ」といった和語の読みを当てるとは考えにくいことから、別の可能性も考える必要がある。

そこで次に目を向けたのが、日本に特に強い影響を与えた中国の文献のうち、先程確認した『四庫全書』に収録されない、「白話小説」類である。「白話小説」とは、文言（書き言葉）で記述されてきた従来の中国文学作品と違い、話し言葉に近い白話文（口語）で書かれたもので、宋代にその様式が成立した小説である。日本においても大変な人気を博し、日本文学にも大きな影響を与えたとされている。次項では、こういった白話小説に見られる「盡頭」「盡處」の用例について詳しく見ていくこととする。

三二、「盡頭」「盡處」の使用例（白話小説）

白話小説中の用例検索には、北京国学時代文化伝播有限公司制作の、『国学備要』を用いた。そして、検出されたもののうち、特に日本に強い影響を与えたとと思われる小説類の用例を左に掲載する。

【盡頭の例】

『水滸傳』第二十二回 閻婆大鬧鄆城縣○朱 義釋宋公明 一五世紀
20 柴進喚一箇莊客，點一碗燈，引領宋江東廊盡頭處去淨手。

『喻世明言』第二卷 陳御史巧勘金釵鈿 一七世紀

21 梁尚賓一向夫妻無緣，到此說了盡頭話，○一口氣，

『警世通言』第二十一卷 趙太祖千里送京娘 一七世紀

22 只見家家閉戶，到盡頭處，一個小小人家，也，開着門。

『醒世恒言』第六卷 小水灣天狐詒書 一七世紀

23 可憐…仗劍長安悔浪遊，歸心一片水東流。北堂空作斑衣夢，淚灑白雲天盡頭。

【盡處の例】

『水滸傳』第六十一回 吳用智賺玉麒麟 張順夜鬧金沙渡 一五世紀

24 正走之間，不到天盡頭，須到地盡處。¹⁰

『喻世明言』第十三卷 張道陵七試趙昇 一七世紀

25 走到盡處，有生成石門兩扇。

『醒世恒言』第二十一卷 呂洞賓飛劍斬黃龍 一七世紀

26 「弟子蒙我師度脫，超離生死，長生妙訣，俺道門中輪回還有盡處麼？」

語義に注意しながら白話小説で検出された用例を調べたところ、「天盡頭（天のはて）」「地盡處（地のはて）」といった比喩的な表現を含めると「空間」「場所」を表す意味で用いられている例が用例全体の約八割であり、多く確認できた。本稿に記載した用例では、20、22、26の例が、「空間」「場所」を表す意味として使われている。

更に、「盡頭」「盡處」は、用例20、24の『水滸傳』や、21、23、25、26の『三言』（『喻世明言』『警世通言』『醒世恒言』）、本稿には記載していないが、『西遊記』や『金瓶梅』のように、日本でもよく知られた白話小説類等で使われており、これらの白話小説を紹介して日本に流入してきた可能性が高いことが窺える。特に『水滸傳』や『三言』は岡嶋冠山、岡白駒といった唐話学者らによる注釈書・翻訳が出ており、日本に大きな影響を与え、深く浸透していた作品であることが分かる。これについては、次項で詳しく触れる。

四、和語「ハツレ」と漢語「盡頭」「盡處」の接触

次に、中国語由来の「盡頭」「盡處」が、如何にして和語の「はづれ」と接触を持ったのか確認したい。

三、において、日本に大きな影響力を与えた資料、特に口語的資料である白話小説に

注目して、そこに見られた具体的な用例を列挙した。こういった中国白話小説は江戸時代の初頭に日本に伝わったとされ、江戸中期以降流行することとなった。それまで文語調の文献を中心に扱ってきた日本人にとって、目新しく興味をひくものであった。もちろん、それまで返り点、訓点を打って読んできた日本人が直ちに白話を読める訳はなく、これらの読み物が広まるにあたっては、白話文を読解できる仲介者が必要となった。

これらの代表的な白話小説に訓点をつけ、更に「通俗物」として世に送り出す仲介をしたのが、「唐話学者」と呼ばれる者達である。その中心人物となったのが、元長崎唐通事の岡嶋冠山である。唐通事を辞め、唐話学者となった冠山の登場以降、冠山を中心として、岡白駒、陶山南濤等を含む優れた唐話学者が登場した。四一は、唐話学者らが制作した唐話辞書類中に見られた「盡頭」の例を記載する。尚、「盡處」の用例は見つけられなかった。

四一、唐話学関連書に見られる「盡頭」

『唐話便覧』一七二五年 岡嶋冠山

27 東ノ廊ノキツハシニカクレ

○**縣在東廊盡頭審察** 寂寂不致高聲トウライトシキクハシニカクレ

『唐音雅俗語類』一七二六年 岡嶋冠山

28 ロウカノハシニ行テ

東廊盡頭處 公淨手トウライトシキクハシニカクレ

『水滸傳譯解』一七二七年 岡白駒撰 良齊編

29 町ハツレ **市稍盡頭** 町ハ

『忠義水滸傳解』一七五七年 陶山南濤

30 町ハツレ

○**市稍盡頭**

『通俗忠義水滸傳』一七五七年〜一七八四年 岡嶋冠山

31 マチハツレノ

市稍盡頭

32 ケイコバノハツレ

教場ノ盡稍

33 市稍二至テ イチハツレニイタリテ

『小説字彙』一七九一年 著者の姓名不明

34 盡頭話 アイソヅカシヲ云

※「盡處」の例は見つけられなかった。

用例 27、28、少し期間が空いて、31、32、33が、岡嶋冠山の注釈、翻訳であるときれている。27、28はそれぞれ「盡頭」に「キツハシ」「ハシ」と意味を添えている。尚、

27については「キツハン」に見えるが、それでは意味をなさないので「キツハシ」つまり「切端」と解釈するのが妥当であると思われる。「切端」とは「あるものの一部」を意味し、ここでは「廊下の端」を意味すると思われる。29、30、31はそれぞれ「ハヅレ」となっている。尚、32は「盡頭」ではなく「盡梢」となっているが、『通俗忠義水滸伝』には「盡梢」と書いて「ハヅレ」と読む例が多くあったので、参考までに挙げておく。34は、「愛想が尽きる」という意識であり、「空間」「場所」を表す意味ではないが、三二で挙げた用例21と対応する注釈となっているので掲載しておく。

29、30は「市稍盡頭」という、『水滸伝』に度々登場する表現で、ここに初めて「盡頭」と「ハヅレ」の接触を確認することができた。このことから、『水滸伝』を初めとする中国白話小説、及び、それに関する岡嶋冠山らを中心とした唐話学者らの翻訳、注釈書・辞書類が、「盡頭」「盡處」の解釈、読み仮名に影響を与えた可能性が極めて高いことが窺えた。尚、29、33で用いられている「市梢」「市稍」という表現について、「梢」「稍」と表記の揺れが見られるが、同様の意味で用いられていると考えられる。

以上を踏まえて、本稿は次項から、白話小説の中でも、後世への影響が強く、資料も多く残っている『水滸伝』、また『水滸伝』に関わる資料を糸口として、読本類に焦点をあてて「盡頭」「盡處」を追っていくこととする。

四―二、読本に見られる「盡頭」「盡處」

次に触れたいのが、漢籍に精通し、『水滸伝』を中心とする白話小説類の翻訳、または翻案を出版した読本小説の作者等についてである。「読本」というのは、井原西鶴を代表とする江戸前期の浮世草子を中心であった日本の読み物とは少し異なったものである。白話小説が広められた後、多くの漢語が流入し、絵ではなく文章が主軸となる「読本」という分野が生まれたのである。都賀庭鐘がその草分けで、これ以後、上田秋成、山東京伝、曲亭馬琴など、江戸後期の読本小説の担い手が多く登場することとなる。

読本作者の中でも、曲亭馬琴は『水滸伝』との関わりが深く、多くの関連書籍を執筆していることから、馬琴の著作に注目して、「盡頭」「盡處」の用例を見ていくこととする。馬琴は一七九六（寛政八）年には『水滸伝』を全面的に借用した『高尾船字文』を出し、その十年後、文化二年に『新編水滸畫傳』初編十巻を出している。こうして出版された『新編水滸畫傳』が十九世紀から二十世紀の半ばまで百五十年間読み継がれることになった。その文脈は先述した『通俗忠義水滸傳』の影響を強く受けていると言われているもので、実質九割以上が、『通俗忠義水滸傳』を引き継いだものであると言われている。曲亭馬琴が手がけたものであるという認識が強いが、実際馬琴が手がけたのは十分の一ほど（初編のみ）で、残り（二編以降）は高井蘭山が手がけたものである。まず、馬琴が手がけたとされる範囲（初編）で、次の用例を見つけることができた。

『新編水滸畫傳』初編 卷之六 一八〇五年 曲亭馬琴 高井蘭山
35 市稍盡頭まちしほじんづれにゆきて見れば

次に、高井蘭山の担当した二編からも一つ用例を載せておく。

『新編水滸畫傳』二編、卷之十二
36 已に正南の盡梢に至り

四一で述べたように、35の「市稍盡頭」は、今まであたってきた中国白話小説に多く登場し、『水滸伝』本文、日本で行われた翻訳、注釈で、「町ハツレ」と訓訳されていた。この用例もそれを引き継いだものとなっている。二編の「盡梢」については、先にも触れたように、中国の水滸伝にはなかった言葉で、『通俗忠義水滸伝』の影響を強く受けたものだと考えられる。訳文に関しては、曲亭馬琴の担当した初編は精密な訳であったのに対し、蘭山の訳は忠実な物ではなかったと評されている¹³。尚、より多くの用例集めを試みたが、『通俗忠義水滸伝』と同様、後半は文脈や表現の改変が多く、見つけることができなかった。

次に、同じ曲亭馬琴の用例で見つかった「盡處」の用例も紹介したい。用例の元の文献は、馬琴の代表作で、江戸時代以降も、日本の文学に多大な影響を与えた『南総里見八犬伝』である。尚、『八犬伝』では「盡頭」の例は見つかっていない。

『南総里見八犬伝』壹卷 一八二四年

第二回 安房は東南の盡處なれば

第二十三回 村盡處まで送りけり

第二十八回 焼刃の盡處、天に虹睨の引く如く

第六十四回 彼處は犬村の野盡處にて、返壁と字せり。

第七十六回 里盡處なる庚申の荒廢堂投て出にけり。

第七十七回 奴家を聽て人煙盡處なる庚申堂へ牽もて去て、

第二十八回の「盡處」というのは、右に挙げた馬琴の用例以外には見つからない。意味を考えるにあたっては、前後の文脈¹⁴を参考にすると、刃について述べられている箇所であることが分かる。この文脈から、「盡處」に当てられている「にほひ」とは、刃物や染色等で色の濃淡をつける部分だと考えられる。刃物における「にほひ」というのが、間接的に「端」の部分を示すことから、馬琴が当て字のニュアンスを強く意識して「盡處」という表記を用いたのだと考えられる。それ以外の用例には、「ハツレ」「ハテ」という読みが当てられており、意味も「場所」「空間」を表すものとなっている。

また、『新編水滸畫傳』『南総里見八犬伝』といった、馬琴の著作の用例からは、読本作者らが唐話学者らの翻訳を参考にしながらも、自らの著作の中で意識をふって取り入れていたことが窺える。従って、この辺りから、「盡頭」「盡處」が意識的に個人の中で使われ始めたのではないかと考えられる。

尚、「盡處」の用例を挙げるのは右が初めてである。『水滸伝』や小説三言に用例はあ

るが、翻訳、辞書類では「盡處」という用例を見つけることができなかった。この理由は、注釈をつけるまでもなく、「盡きる處」として、容易に訓読することができる語彙だからである可能性が考えられる。一方で「盡頭」の方は、「頭」という接尾辞が用いられている点で、日本人にとって意味が分かりづらく、注釈及び和訳する必要があるかと考えられる。

五、明治・大正期の小説と白話語彙

二、でも述べたように、最初に挙げた用例を含んだ小説類の作者は、森鷗外、三木竹二（鷗外の弟）、二葉亭四迷、尾崎紅葉、幸田露伴、田山花袋という、当時の知識階級の者達である。明治・大正期の知識階層は、基本的に漢文の「素養」というものを備えており、漢籍や近世中国語の知識が深かった。特に森鷗外、そして今回用例にはなかったが、夏目漱石など、当時の文壇の中心人物は、日本語で書かれた小説以外にも、多くの漢文を残していることで知られている。しかし、単に「漢文の素養を備えている」というだけでは、彼らが白話小説類及びそれらの要素を多く取り込んだ読本から「盡處」「盡處」といった特定の語を採用し、自らの小説に練りこんだとは言いが切れない。そこで、ここでは知識階級と白話、読本類との具体的な関係について明らかにする必要がある。

明治期の知識人階級と白話小説の接点として記録に残っているものとして、最初に触れたのが、森鷗外、三木竹二、幸田露伴、尾崎紅葉ら四人に共通する雑誌、『めざまし草』である。『めざまし草』は鷗外の弟の三木竹二、森鷗外、幸田露伴、芥藤緑雨が『しがらみ草紙』の後をついで創刊した文芸雑誌である。一八九六年一月に出された一号から、一九〇二年二月の五十六号まで続いた雑誌で、内容は、主に当時発表されていた小説類の批評であった。しかし三十号から三十一号にかけては、その批評対象を『村井長庵巧破傘』『好色一代女』『水滸伝』『浮世道中膝栗毛』『神靈矢口渡』『琵琶記』等の日本や中国の古典書籍にあてて行っている。

白話小説である『水滸伝』の回においては、通常の小説類批評よりも議論は少なかったものの¹⁵、馬琴・蘭山の『新編水滸書傳』等の翻訳本にも言及しながら、森槐南の研究を元に詳しい分析がなされている。ここから、鷗外らのような漢文の知識が深い知識階級にとって『水滸伝』という作品が研究対象となっていたことが窺える。次項、五一、五十二では、特に漢文に精通していた代表的な例として、露伴と鷗外について、彼らの白話小説、白話語彙との関わりについて述べる。

五十一、幸田露伴と白話小説

最初に、『水滸伝』という作品と非常に関わりの深い幸田露伴から見えていく。露伴は自身の小説『雁坂越』（一九〇三年）・用例7において「盡頭^{はげれ}」を用いている。また、先述した『めざまし草』の一八九七年刊行の卷之二十『水滸伝』においては、特筆すべき発言は見当たらなかったが、その後自身で『水滸伝』を翻訳、翻案していることから、近世白話小説語彙にもよく精通していたことが考えられる。露伴が翻訳した『水滸伝』は、

非常に忠実に訓読されており、多数の用例を見つけることができた。左にその用例を載せておく。

『國譯漢文大成』一九二三年 幸田露伴

「水滸傳 上」

二六四頁 楊志的の馬早く跑けて教場の盡頭に到り 【注】はづれ

四六六頁 東廊盡頭の處に去いて浄手せしむ。

「水滸傳 中」

二二頁 三箇市梢盡頭に来到す、

二六頁 天の盡頭に到らざるも、早く地の盡くる處に到りて 【注】はづれ

三六六頁 只用て天の盡頭に走一遭し了し

五三〇頁 天の盡頭に到らずば、地の盡處に到るべし

「水滸傳 下」

四一九頁 龔家村の西の盡頭の柳大郎の處に到りて

訳、注ともに幸田露伴が付けたもので、上巻は一九二三年に、下巻は一九二四年に初版が出版されている。訳文自体は非常に硬く、忠実に訓読しようとした姿が窺える。二、の用例7『雁坂越』では、「盡頭」を「はづれ」と読みをつけていたが、『水滸傳』上巻、中巻では漢文らしく「ジントウ」と読みをつけ、注部分で「はづれ」とつける形態を取っている¹⁹。

その他、露伴は、先に載せた『南総里見八犬伝』及び作者である曲亭馬琴に言及することも多かったということが窺えた。明治四十三年から明治四十四年には、「八犬伝」「椿説弓張月解題」「馬琴日記鈔論評」「題水滸傳」「馬琴の小説とその当時の実社会」「馬琴佳作集に題す」等の題の、短い文章が発表されている。

このように漢文・漢籍に詳しく、また、日本の文学においても「盡頭」「盡處」という表記をよく用いていた馬琴に詳しくあったことから、露伴が中国白話小説、読本類から語彙を採用していたということは十分に考えられる。

五―二、森鷗外と白話小説

次に『めざまし草』を刊行した三木竹二の兄でもある森鷗外に焦点を当て、白話小説及び読本との関係について検証したい。

鷗外もまた、漢文や漢詩についての先行研究は数多くあるが、今回は鷗外の漢語といふものに焦点を当て、小島憲之『ことばの重み』（新潮選書 一九八四年）に挙げられている漢語を中心とした研究を参考にする。小島（一九八四）は、鷗外が用いた語彙の

出自を追っていく内容のものである。主に、小島氏個人が見慣れない語や、疑問を持った語に焦点が当てられている。小島(一九八四)(一七三頁 第八「胡蘆」)の中で、森鷗外が度々使用している語彙のうち、小島憲之氏が見慣れない漢語として、中国の「近世語」が挙げられている。筆者は特に「盤纏ばんせん」という言葉についての記述に注目した。

『独逸日記』一八八四～八年 森鷗外

37 其相識の婦人皆旅行するときは、自家のみ郷に留りて、人の盤纏ばんせん之きを疑はんを慮り、夫を勧めて旅行するなり。

この「盤纏ばんせん」という言葉は、「盡頭」「盡處」の用例を探す過程で、白話小説『水滸伝』にも見つかつた。そして、白話小説が日本に流入するに至って、「盡頭」「盡處」と同様に、唐話学者によって注が付けられていた。

『水滸伝譯解』一七二七年 岡(白駒)撰良齋

38 ロギン 旅途ノコツカイ 盤纏ばんせんノコツカイ

『水滸伝字彙外集』作者・年代不明

39 盤纏、ロヨウロヨウ

盤纏ばんせんノコツカイ

この「盤纏ばんせん」は読本類にも多く散見された言葉である。左に一部例を挙げておく。

『忠臣水滸伝』山東京伝

40 便機に乗て盤纏ばんせんをうばひとらんとす

40* 彼金なくては陸奥いくだる路費ろぎにさへことをかき

『新編水滸畫傳』曲亭馬琴、高井蘭山

41 身を終るまで盤纏ばんせんは、こゝろを添て得させん

40は馬琴の師であつた山東京伝の著作『忠臣水滸伝』の中で用いられていた例で「ロギン」と読まれている。40*は、同じ読み「ロギン」の違う表記として載せておく。41は馬琴の『新編水滸畫傳』に見られた例で、「ツカヒガネ」と読みが当てられている。

「盤纏ばんせん」も『水滸伝』等の中国白話小説に多く登場する語彙である¹⁸。右に挙げた用例の通り、近世読本でも盛んに用いられた語彙であり、読み方も何通りかあるが、和語の読みを当てている例が多く見つけられた。「読み」に和語が当てられている点や、散見される資料元などから、「盤纏ばんせん」も「盡頭」「盡處」と同じような経緯で使われるようになったのではないかと考えられる。

つまり、まず最初に白話小説内で用いられている語彙を唐話学者が読み取り、更にその語彙を読本作者らが文中で使い始め、明治・大正期の知識人らが、白話小説類、読本類双方を参照して引き継いだと考えられる。

六、総括

以上を踏まえて、今回問題とした「盡頭」「盡處」という表記が、中国から流入してきた経路は二つあるのではないかと考えられる。一つ目が、「学問書や実用書といった漢籍を介して、中世から江戸前期にかけてそこに含まれていた語彙（盡頭・盡處）が日本の一部の学僧や儒学者らに伝わった」という経路：①。二つ目が、「中国白話小説が流入し、唐話学者らが翻訳（通俗もの）、注釈等を行うことにより、特定の語彙（盡頭・盡處）が江戸中期から後期にかけての読本作家、明治・大正期の知識階級に引き継がれる経路」：②である。

今回問題にした、明治・大正期に見られる「ハヅレ」という読みが当てられた「盡頭」「盡處」というのが、②の経路を通して用いられるに至ったことは、語義の面から考えても明らかである。中世に用いられた「盡頭」の例が、場所に限らず「終わり」や「極点」を表すのに対し、明治・大正期の「盡頭」「盡處」が専ら「場所」という意味で用いられていたのは、中国からの流入経路の違い、受容のされかたの違いに起因すると考えられる。①は一部の学僧等が学問書の類をそのまま漢籍として、受け入れられたのに対し、②は白話小説という特定の分野から唐話学者、読本作者らといった仲介を経て流入してきた。それ故に、「読み」や「語義」に変化が起こったと考えられる。

七、今後の課題

明治・大正期の知識人らが、どういった意図を持って一般的¹⁹でも実用的でもないこれらの表記を使ったかについても、考える必要がある。

まず、白話語彙を始めとする複雑な漢語や、諸外国の語を使用することは知識人特有のペダンチックな表現の一つであったとも考えられる。昭和前期以降に、この表記が見られなくなる理由としても、徐々に、こういった「当て字」や、漢学の知識というものの装飾的価値が下がり始めたからだと考えられる。こういったことを前提として、次に使用されている年代や小説類の区分についても調べる必要がある。

「盡頭」「盡處」が使用されている作品の特徴に目を向けると、傾向として、「文語体」ではなく「口語体」、もしくはそれに近い文章に多いということが分かる。具体的には、本稿に記載した二葉亭の用例8、そして鷗外の翻訳小説12、13については、努めて口語体で書かれた小説類であり、紅葉や露伴に見られる5、7のような文章は、「雅俗折衷体」である。文語体で書かれた小説類の用例は今のところ見つからない。

現時点では、「盡頭」「盡處」の表記を使用している全ての作家の作品を検証するには至っていないが、鷗外の文語体小説については、「盡頭」「盡處」と書いて「ハヅレ」と読む表記は、翻訳小説類のみ見つかっている²⁰。『舞姫』以降は、文語体となり、「盡頭」「盡處」という表記も、『作家用語索引 森鷗外』（教育社 一九八五年）で調べた限りでは見つからない。同じ書き手であっても、「盡頭」「盡處」という表記を使用する文章もあれば、使用しない文章もあり、その一つの使い分けという基準が、「文体」にあったのではないか、というのが現時点で立てられる仮定である。

【注】

- 1 『新編 日本古典文学全集 狭衣物語(2)』による。凡例によれば、各底本校合のうえ本文を作成、また作成段階での修正も加えられている。従って平安時代原文とは言い難いものの、「はづれ」という表現が当時から用いられていた可能性を示す一つの指標にはなると考え、ここに挙げておく。
- 2 3の作者義堂周信は、南北朝時代の臨済宗の学僧である。梵・漢の学に通じ五山文学の代表的人物であった。
- 3 4の作者である山崎闇斎は、江戸前期の儒学者で、朱子学にも通じていた。当然、漢籍にも精通していたと考えられる。
- 4 『青空文庫』に対応した検索システム。
- 5 『書言字考節用集』に記載されている「端緒」と書いて「ハヅレ」と読む例は発見できなかった。「端緒」という表記自体は全八十八例あった。
- 6 八十三例全て「場所」を表す意で用いられている。
- 7 森鷗外のこと。
- 8 「調高矣津弦一曲」は、カルデロン・デ・ラ・バルカの『サラメヤの村長 (El alcalde de Zalamea)』翻訳である。
- 9 当時の『読売新聞』は小新聞、所謂タブロイド紙であり、大衆向けの新聞であった。
- 10 「盡頭」と「盡處」が同一文で使われている例。
- 11 「盡稍」は、中国語の文献には見当たらず、辞書類を引いても見当たらないことから、冠山が作り出した可能性が高い語である。
- 12 岡嶋冠山『通俗忠義水滸傳』については、岡嶋冠山の訳ということにされてきたが、一九五八年、白木直也氏によって、疑問が投げかけられ(『広島大学文学部紀要』第十三巻)「通俗忠義水滸傳」の編訳者は誰か)、岡嶋冠山ではないのではないかとという見解が出されている。筆者自身、前半の部分はかなり忠実に書き下されている点、それにも関わらず、途中からエピソードの欠落や『通俗忠義水滸傳』を見るにあたって訳文の統一性がない点等に違和感を覚え、冠山の用例ではないのではないかとという疑問を抱いたが、本論では訳者の違いが大きな問題にはならないことから『通俗忠義水滸傳』の作者を岡嶋冠山としておき、詳しく触れないでおく。
- 13 曲亭馬琴の手がけた『新編水滸畫傳』初編については、明治期の『めさまし草』で「高井蘭山はむつかしいところや分かれぬところは抜いてしまったのですが、馬琴はどうなりかうなり、一字一句とは行きませねど兎に角善く譯してある。」と評されている。
- 14 刀の鞘を推立て、刀尖より鏢下。(つばもと)まで、瞬もせず倍と見て、「現音に聞く村雨の宝劍。拔ば玉散る、露敷露敷。奇也妙也。焼刃の盡處、天に虹睨の引く如く、地に清泉の流るゝに似たり。豊城三尺の水、吳宮一函の霜、寔に世に稀なるべし。』『南総里見八太伝』
- 15 『めさまし草』を参照して確認したところ、他の巻ではそれぞれが意見を述べて、議論を交わしている様子が窺えたが、『水滸傳』の回に関しては、三木竹二が森槐南から聞いたきた『水滸傳』の成立・受容の研究に関しての中心に述べるにとどまっていた。
- 16 下巻になると、訳全体が軟化していき、最後の「盡頭」の例には直接「はづれ」という読みを当てている。
- 17 路用の意。
- 18 『醒世恒言』第二十二回
元禮變賣一兩處爲上京盤纏。
- 19 70頁の結果から使用頻度の高い語ではないと分かる。
20 翻訳小説以外には、『伊澤蘭軒』中の漢詩部分に「盡處」が見られるが、小説類ではないこと、「盡處」が用いられているのが漢詩中であることから、例外とする。

参考文献

- ・『めざまし草』巻之二十 盛春堂 一八九七年
- ・小島憲之『ことばの重み 鷗外の謎を解く漢語』新潮選書 一九八四年
- ・小島憲之『日本文学における漢語表現』岩波書店 一九八八年
- ・山田俊雄『成城国文学論集「近代の常用漢字―森鷗外訳「玉を懐いて罪あり」の場合」』成城大学大学院文学研究科（通号二十四）一九九五年
- ・山田俊雄『ことば散策』岩波新書 一九九九年八月二〇日
- ・高島俊男『水滸伝と日本人』筑摩書房 二〇〇六年十一月十日
- ・斎藤希史『漢文脈と近代日本』日本放送出版協会 二〇〇七年
- ・徳田武『近世近代小説と中国白話文学』汲古書院 二〇〇四年

使用データベース

- ・青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/> 明治・大正期の「盡頭」「尽端」の用例検索（日本語用例検索）(<http://www.tokuteicorp.us.jp/tean/jling/kwic/>) 使用
- ・国学備要 中国語としての「尽头」「尽处」の用例検索
- ・四庫全書 同右
- ・大正新脩大藏經データベース <http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>
- ・ヨミダス歴史館 明治・大正の読売新聞CD-ROM

引用資料（引用順）

- ・『新編日本古典文学全集』〔狭衣物語②〕小学館 二〇〇一年 第一版第一刷発行
- ・『山崎闇齋學派』岩波書店 一九八〇年
- ・『尾崎紅葉集』筑摩書房 一九六五年
- ・『田山花袋集』筑摩書房 一九五五年
- ・『幸田露伴集』改造社 一九二七年
- ・『二葉亭全集』東京朝日新聞発行所 一九一〇年
- ・『鏡花全集』第二十三巻 岩波書店 一九四二年
- ・『黒岩涙香集』筑摩書房 二〇〇五年
- ・『読売新聞』一八八九年十一月五日掲載
- ・『改訂水沫集』春陽堂 一九〇五年
- ・『理學叢書 朱子語類』第一冊 中華書局編輯部 一九八三年
- ・『容與堂本水滸傳』上海古籍出版社出版 一九八八年
- ・『古今小説』上海古籍出版社出版 一九八七年
- ・『警世通言』上海古籍出版社出版 一九八七年
- ・『醒世恒言』上海古籍出版社出版 一九八七年
- ・『唐話辞書類集』第三巻 汲古書院 一九七〇年
- ・『唐話辞書類集』第十三巻 汲古書院 一九七三年
- ・『唐話辞書類集』第十五巻 汲古書院 一九七三年
- 岡嶋冠山『唐話便覧 巻五』一七二五年
- 岡嶋冠山『唐音雅俗語類 巻三』一七二六年

- 岡（白駒）撰良齋『水滸傳譯解』一七二七年
陶山南濤『忠義水滸傳解』一七五七年
岡嶋冠山『通俗忠義水滸傳』一七五七～一七八四年
姓名不詳『小說字彙』一七九二年
- 『近世白話小說翻譯集』第六卷「通俗忠義水滸傳」汲古書院 一九八七年
 - 『新編水滸畫傳』一 有朋堂書店 一九二七年
 - 『國譯漢文大成』國民文庫刊行會一九三三年
 - 『鷗外全集』岩波書店 一九三七年